

事例 6

コーディネーター名	金田 裕美子	活動学校	那須町立田代友愛小学校
コーディネーター歴	3 年	経 歴	元保護者（PTA 副会長）、統廃合委員

1 コーディネーターを始めるきっかけ

那須町では、学校適正配置に伴い統廃合が進んでおり、統廃合しても「地域の子どもは地域で育てよう」という地域の思いを継続し高めるために、那須町版コミュニティスクールを導入している。統廃合した学校から順次このシステムが導入され、学校と地域ボランティアとを円滑に結ぶため、学校内に非常勤のボランティアコーディネーターが配置されている。このコーディネーターは、統合する学区それぞれから 1 名選出されることとなっており、旧田代小学校で PTA 副会長や統廃合委員等をやっていたという経緯から、学校長より指名され、統合当初よりコーディネーターとして活動することとなった。旧室野井小学区より選出されたコーディネーターも 1 人いて、現在、計 2 名で活動している。

2 コーディネート活動の概要

主な活動としては、学習支援や環境支援のコーディネート、情報の収集と提供である。学校との打合せは、週 2 回訪問し、地域連携教員（教務主任）と行っている。特に時間等は決めていない。先進的な活動として、教育課程で実施しているもの以外に、学校を会場にして、コーディネーターが企画し実施している「サマースクール」「プログラミングディ in 那須町」がある。

○サマースクール

夏休みに、英語、パソコン、工作等の 8 講座を 2 日間にわたり実施。隣接学区のコーディネーターから講師情報の提供を受けたり、先生や中学校区のボランティアの協力を得たりしながら、子どもたちの興味を引くような講座を開設することができ、今年度は延べ 215 名もの参加があった。（全校生 167 名）

○「プログラミングディ in 那須町」

休日に学校を会場に、プログラム体験イベントを今年度初めて開催。このイベントは、米 IT 大手のマイクロソフトと NPO 法人「キャンパス」（東京）が推進するプログラミング学習普及プロジェクトの一環で、コーディネーターが那須町教育委員会とこのプロジェクトをつなげ、実施に至った。大人の部、子どもの部の 2 部構成で行われ、各 30 名の参加があった。



「プログラミングディ in 那須町」の様子

3 コーディネート活動がうまくいくためのポイント

① 学校からの支援

■ 情報発信

学校長が学校だよりのなかに「地域連携コーナー」を設け、コーディネーターの紹介や地域連携活動の紹介を行っている。

■ 地域連携教員（教務主任）との連携

地域連携教員は、学校側の要望を遠慮せず本音で全て伝えてくれる。例えば、コーディネーター側で提案したことに対して、学校の状況に応じて無理なことは無理、駄目なことは駄目とはっきり伝えてくれる。

■ コーディネーターの活動場所

コーディネーターの居場所、活動場所が職員室にある。先生たちのボランティアのニーズを把握するとき、まず先生が要望を紙に書き、地域連携教員がそれをまとめてコーディネーターに依頼するといった流れをとっている学校が多いと思う。本校では、コーディネーターが職員室にいて、休み時間の先生とのたわいもない話から信頼関係を作ることができ、要望を直接把握しやすくなっている。また、地域連携教員である教務主任から「紙に書いて提出してください」などと依頼されると、トップダウン的な感じになり、先生たちはやらされている感が強くなってしまふと感じる。

② エ夫していること、心掛けていること

■ 活動を始めるまで

コーディネーターとして配置された当初は、学校から「負担が大きい、保護者が職員室に入ることも負担だ」といった声があった。そこで、まず、先生との信頼関係作りに努めた。職員室で聞こえた話は外へは漏らさないことを徹底するとともに、なかなか学校まで届かないような地域の情報を先生に提供した。2 年目になると、先生との信頼関係が少しずつできてきたので、先生に「学校支援ボランティアとしてこんな人がいる」「学校支援活動としてあんなことができる」等と積極的に情報提供し、前向きに行動した。地道な活動を続け、3 年目にやっと先生からリクエストをもらえるようになった。今では、先生たちが地域連携以外のことで相談してくることもある。

■ 先生やボランティアとのコミュニケーション

- ・学校長の采配次第で、地域連携は大きく変わる。学校長は地域連携を推進していく上で要である。したがって、学校長との十分な話し合いの時間を確保し、よくコミュニケーションをとることを心掛け、学校経営方針や学校長の考えを理解し、その意に沿うような地域との連携を行うことができるよう努めている。
- ・ボランティアの性格、やりたいこと、評価されたい気持ち等を踏まえながら学校側の要望とマッチングさせることはとても難しい。だから、どちらともよく話し合う、コミュニケーションをとるように心掛けています。また、悪いことも含めて受け入れ、相手側に上手く伝えるようにしている。

■ コーディネーター同士の連携

コーディネーターが 2 人いるので、役割分担を明確にしている。自分は学区内の人脈が薄いので主に企業や学区外のコーディネートを、もう一人は学区内の人脈が厚いので主に学区内のコーディネートをするように役割分担をしている。また、普段のコミュニケーションを大切にしている。

■ 名前を覚えてもらうためにしていること

名前を覚えてもらえるよう、名刺を作成し、持ち歩いている。(以前、名刺交換時に名刺がなくて困った)

③ 町の支援

地域コーディネーター交流会を年 3 回、那須町教育委員会生涯学習課が事務局となり、開催してくれている。これによって横のつながりができ、互いに悩みやボランティアの人材情報を共有したり、相談したりすることができる。サマースクール開催の時に、このつながりが役立った。また、コーディネーターの活動がまだよくわかっていないような新しいコーディネーターが、活動について相談しやすい環境が整ったと感じる。

4 コーディネーターとしてのやりがい

コーディネートした授業や活動の時に、子どもたちが目をキラキラ輝かせ、先生たちが笑顔になったとき、「つながったな」という思いを感じることができ、達成感がある。その瞬間がたまらなく、やりがいを感じる。

5 活動上の課題

■ 後継者について

後継者は、PTA・育成会の役員OB、またはボランティアに何度も協力している人がよいと考える。いつまでも自分がコーディネーターをやるわけにはいかないの、次に引き継ぎたい候補を考え、今から声を掛けている。できれば何年か一緒に活動し、軌道に乗ったら自分が退きたいが、町が配置するコーディネーターの定数が決まっているため、そのような流れがとれないのが課題である。

■ 活動の継続について

つながったものを継続させていくには、よいものを残していくには、どうしたらよいか、悩んでいる。

■ 先生一人一人の地域連携に関する理解、意識の向上

地域連携に関わっていない先生の地域連携に対する理解や意識は、まだまだ低いように感じる。また、個人差も大きい。地域連携についてヒントを探れるような動画配信などがあればいいのではないかと。(パンフレットや冊子を作っても、先生たちは読む時間がないので。)

6 その他

- ・様々な世代のコーディネーターがいるが、年代が上の方ほど「教えることはできないし、教育についてわからない」と言っている。人脈等、自分たちの世代とは違う強みがあるので、それを生かしてほしいと感じる。
- ・地域と学校がつながることで、何かワクワクするようなことができたらと思っている。そんなワクワクを積み重ねることによって、地域や学校を元気にしたい。そして、子どもたちのやる気につながればとも思っている。そのやる気がやがては学力の向上にもつながるのではないかとと思っている。